

## 短 報

### 胚乳栄養期稲幼苗によるウンカ、ヨコバイ類の室内累代飼育法

鈴木 忠 夫

(農林省北陸農業試験場)

稲種子胚乳部の活用をねらった、胚乳栄養依存期の幼苗をセジロウンカ、ツマグロヨコバイに吸汁させることにより、温室を利用することなく、秋冬期を通じて、かなりの規模での室内累代飼育の可能性が認められた。すなわち、稲穂の胚乳栄養は幼苗の4～5葉期まで保存するので、25°C恒温下で第1葉抽出時よりの飼育期間は約10日間位認められる。10日以後は更に別途準備した幼苗に移し換えることになる。2～3回の移し換えて孵化幼虫を成虫にまで発育させ得る。両虫とも秋冬期を通じ3～4世代室内飼育を行つた。成虫の産卵増殖もかなり認め

られる。1世代の飼育期間は25°C下で約3～40日である。飼育容器は高さ10cm位が必要であり、絹網でおおつた腰高シャーレー(9×9cm)を用い、発芽は砂又は土を敷いて行わした。初量は飼育頭数に応じて準備すればよく、1畝で2頭位の飼育が可能である。大体9×9cm容量で約200頭飼育ができ、更に1容器で多量飼育を行うには面積の広い容器を用うればよい。暗室内のみによる累代飼育も可能であり、増殖も認められる。本法は飼育上の改良点も残されるが、温室を利用しない秋冬期を通じての室内累代飼育法として興味がある。

### 福井県下のニカメイガ発生地域性

友 永 富・水 谷 真 澄

(福井県立農事試験場)

ニカメイガの発生予察事業に携つていると必ずしも県下全般に発蛾最盛期にしても発蛾量においても均一な発生を示さないで、局部的に特異な発生様相を呈することがある。

そこで発生予察事業の精度向上の一環として、これらの地域性を明らかにしようとした。

調査方法は1958年から1960年にわたる県下45ヶ所の予察灯の発蛾最盛期と発蛾量について石倉(1948年)の方法に準じ標準偏差を求め、その値の平均値に対する百分率として変異係数を算出して検討した。

その結果発蛾最盛期も発蛾量の場合も1化期の方が2化期よりやや変動が大きいようにかがわかるが、顕著

な差がなかつた。しかし1・2化期とも全般に変動が大きいことがわかつた。発蛾最盛期の変動を平坦部山間部別にみると、1化期は平坦部に2化期は山間部に大きい傾向がある。発蛾量は1・2化期とも平坦部の変動が大であつた。

石倉は発蛾最盛期の変動は1化期に、発蛾量の変動は2化期に著しいことを報じ著者らの結果と相違しているのは統計年数耕種条件の変更等の差異によるものであろう。さらに発生型や生態型との関連において検討したところ発蛾最盛期、発蛾量のいずれも早発2化型、庄内型中間型地帯に変動の大きいことが注目された。

### ニカメイチュウの生物的防除に卵寄生バチは利用できるか?

大 竹 昭 郎

(農林省北陸農業試験場)

ニカメイガの卵寄生バチは、主としてズイムシアカタマゴバチとズイムシクロタマゴバチの2種類である。卵

寄生バチには、ニカメイガがイネに害を与える発育段階、すなわち幼虫期に達する前に、この害虫を倒す利点